【論考】

国際的な日本の面影

Glimpses of International Japan

京都工芸繊維大学副学長　ジュセッペ　ペッツォッティ

Giuseppe Pezzotti

(Vice President, Kyoto Institute of Technology)

キーワード：国際化、海外留学

「ロッテルダムのデジデリウス・エラスムス」、一般的にはエラスムスとしてその名を知られている人物は、ルネッサンス期のオランダの人文主義者、カトリック司祭、神学者であり、15 世紀末から 16 世紀初頭にかけてヨーロッパで活躍した。古典の学者であったエラスムスは、多くの重要な文章を正確なラテン語で書き残し、その文章は、宗教改革の進展と、それに対するカトリック教会の改革の双方に影響を及ぼした。カトリック教会の不正に常に批判的でありその改革の道を目指しながらも、彼はローマ教皇の権威を常に認識し、ルターの革新的なビジョンを受け入れることはなかった。彼は、「予定説（個人の救済は人間の意志や能力によるのではなく、神の自由な恩恵に基づくとするキリスト教の教理）」に対し「自由意志説」の教義の深い信奉者であり、ヨーロッパにおける最初の「教養人」の一人であった。彼は、いくつもの言語を学び、生涯ヨーロッパ中を巡り、同じ文化的ルーツを持つ人々を結びつける人文主義的な社会をつくるという夢の実現を試みた。1987 年に欧州連合がヨーロッパ域内の大学間の多文化間交流プログラムを新たに立ち上げたとき、彼の名前をプログラム名に冠したのはこのためである。この「エラスムス計画」は、ヨーロッパ域内において 30 年間にわたりすべてのヨーロッパ市民の考え方に共通の価値観、目標、意識という道を開く真の変革をもたらした、若者世代そのものを生み出した。この 30 年間に、ヨーロッパの 400 万人以上の若者が他国で学び、その教師やボランティア、職員までも含むならば、その数は倍以上、おおよそ 900 万人にも及ぶ。今ではヨーロッパにおいて“エラスムス型”世代が活躍し、かつ、その子供や家族に国際教育を施すに至っている。周知のように、このプログラムは近年（つまり 2014 年に）あらたに「エラスムス・プラス」という形で強化され、今では 33 か国の 69,000 もの教育機関が参加するものとなっている。日本もその国の一つに加えられたことで、この国際的なプログラムの良い影響を受けることとなり、より多くの学生がヨーロッパから日本の大学へ毎年学びにやって来ている。欧州連合の予算によれば、2020 年ま

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

でにおよそ150億ユーロがヨーロッパの若者の国外での教育に充てられるという。エラスムス計画は、当初単なる実験的な試みとみなされ、英国からは懐疑的な意見が呈されながらも1987年に欧州議会での承認を得たものだが、予想をはるかに超えた文化的財産を我々にもたらしていると、今ならば断言できる。

エラスムス計画やエラスムス・プラスが、地球規模での国際化を促すイニシアチブとして、欧州において実施された最も成功した取組みであるとしても、この種の取組みとしては決して唯一でも世界初のものでもない。1945年9月、アーカンサス州の上院議員J.ウィリアム・フルブライトによりフルブライト奨学金プログラムの法案が米国連邦議会に提出された。この法案は、「教育、文化、科学の分野における学生の交流を通じた国際的な親善の促進」に資金を提供するため、第二次世界大戦や他の戦争で使い残された物資を売り払うことで得た資金を使うことを求めた。1946年、トルーマン大統領はこのいわゆる「フルブライト法」に署名した。フルブライト法においては次の二つの原則が強調された。一つには、当時はごく一部の富裕層しか海外留学できなかったことから、国際的な教育体験のための学生選抜にあたっては、民主的な手続きを増やす必要があるということ、二つ目には、破滅的な戦争の後で、平和の意識を高め、また、異なる人々の間での国際的な関係構築を促すことで、新たな戦争の危機を減じる必要性があるということである。今日、フルブライト・プログラムは世界で最も広く知られ、権威ある国際的な交流プログラムとなった。属する社会の多様性を十分に代表し、かつ、将来輝かしい業績を残す可能性を持つ個人を求めるこのプログラムは、徹底して候補者のポテンシャルとこれまでの成果を重視し、開かれた形の競争によって選考を行っている。70年以上にわたり米国連邦議会により毎年審議され決定されているフルブライト・プログラムによる支援は、米国人と、日本を含む多くのパートナー国の人々が、世界中の未来ある若者に、賢明かつ平和な社会へと将来の人類を導くようにと与える贈り物と言えよう。国際的なパートナーシップと相互理解の原則がフルブライト・プログラムの使命の核として確固たるものとしてあり続ける限り、社会的・科学的な優先順位のもと、共通のニーズを満たすプログラムを作り出すことによって、世界中のパートナー国との関係を育むという強力なメカニズムを世界は持ち続けるのである。

日本政府は、国際化に関する学生支援プログラムにおいて、歴史的な、あるいは象徴的な人名を用いることはしてこなかった。歴史上、それに相応しい人物は日本にもいたのであり、例えば私が思い当たるのは、徳川幕府時代後期の人物、本多利明である。彼はエラスムスに似た人格を持ち、本質的な意味での「国際的日本人」の象徴とも言える存在である。独学で習得したオランダ語を流暢に話し、オランダ語で書かれた科学書を読んだ。当時、珍しかった数学や天文学といった西洋からの学問に関する知識をもって、彼は日本の開国を提唱する先駆者となった。今、日本の海外留学に関する国際交

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

流プログラムは、その名前に象徴性はないものの、量的にも、なにより質的にも、非常に目覚ましいものがある。これは、海外とのつながりを望む日本の若い世代の強い意志に適切に応えたものであり、これまで数十年にわたりフルブライト・プログラムとエラスムス計画が社会的にどれほど大きな効果をもたらしたかを認識したうえで、それらに相当するものとして作られたものである。事実、日本学生支援機構（JASSO）海外留学支援制度は、エラスムス計画とフルブライト・プログラムのエッセンスを融合したようなものに思われる。資格を満たす国際的な学生を選抜し、高い意欲がありながら経済的理由で勉学の遂行に困難を伴っている学生に奨学金を支援している。完全に互恵的なプログラムとして、この制度は海外に行く日本人学生も、日本に来る外国人学生をも支援している。日本の文部科学省はまた、国際的な人材育成という日本国内の強い要請にこたえる形で、「トビタテ！留学 JAPAN」というプログラムを運営し、海外留学する学生に経済面でも情報面でも豊かな支援を行っている。これらのプログラムの背景には、国際水準を満たす日本のリーダーの育成と、日本に対する深い理解、感謝、敬意を持った外国人リーダーの育成、その両面への貢献を期待する国民からの視線がある。高等教育そのものの領域が拡大し続け、学際的な分野が増大していくなかで、日本政府が主導するプログラムは量的拡大と質的多様性の両面を満たす仕組みを適切に提供できているように思われる。また、より重要な点は、日本の国際プログラムは、欧州や米国と同様に、世界の文化的進化を牽引する国へと日本を押し上げていることにある。この三つの地域はそれぞれ、若者世代の社会的地位や国籍にとらわれることなく、その世代に対する寛容さと未来への先見性とを併せ持っているのである。

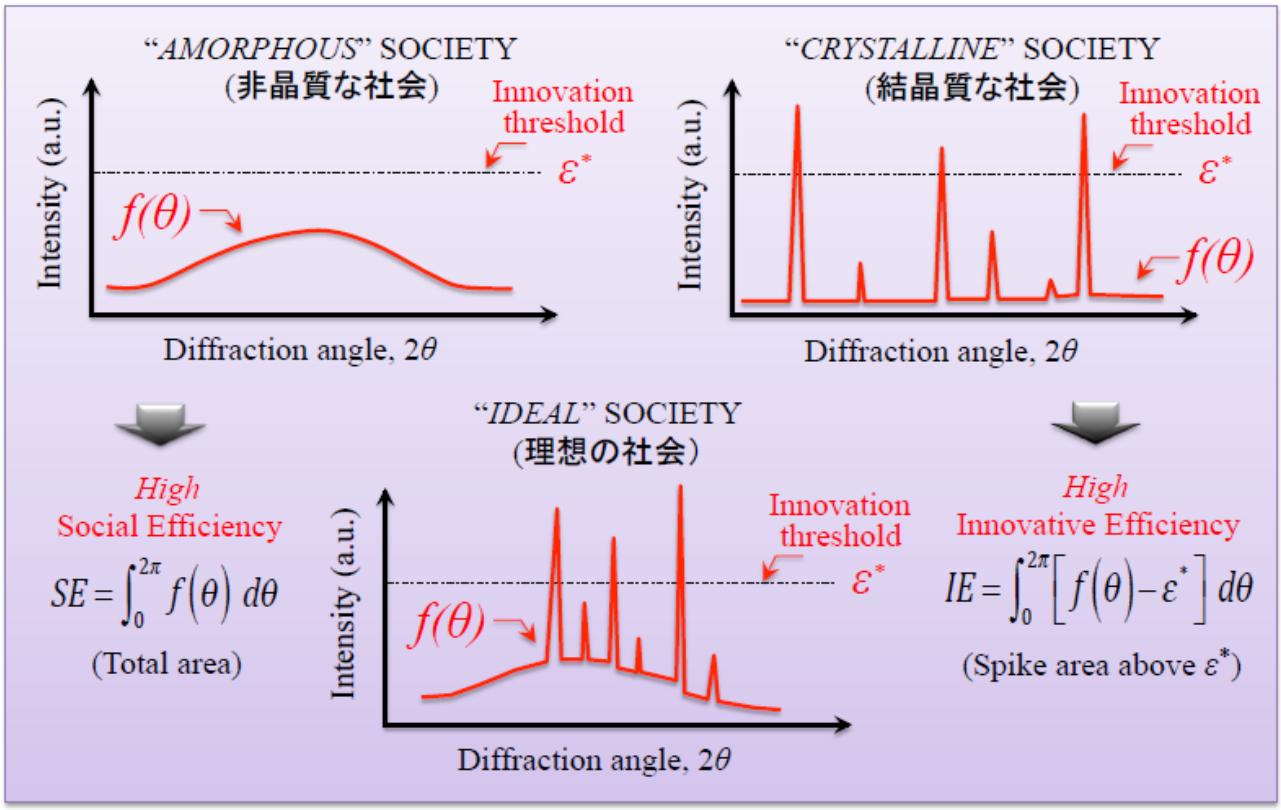
さて、ここまで、次世代の学生の国際化に向けて最も重要な方向性は何かを考えるにあたり、私が考える主な歴史的視点を簡単に紹介したところで、現代の日本社会におけるこのような取り組みの必要性とその効果について、私自身の意見を述べたい。教育革新とは、技術、経済、社会活動といったあらゆる領域にわたる複雑な現象を含むものであるから、それを効果的に運用するためには、明確な指針、新たな定義、そしてそれを測定する定量的な手法が必要となる。このため、社会的効率性と革新的効率性のバランスこそが重要なコンセプトとなり、またこのバランスは、文化の根源的な差異と、意思決定に必要となる条件にも関係してくる。社会的効率性に影響を及ぼす要因は、ハイレベルながら標準化された人材を継続的に確実に生み出すことにある。しかしながら逆説的に、革新的な活動による強い上昇は抑制されてしまうことになる。事実、日本の教育制度は、その分野の研究者らの見解によれば、伝統的に均一性を追求するものであり、これでは、個性や独創性にほとんど余地が残されないこととなる。言い換えると、学生間での競争を促さない統一性が長年追求されてきたのであり、政府役人のエクセルファイル上でも、その成果を判断するにあたり、最大値ではなく平均値ばかりが系統的に好まれてきた。卓越性は、均一でゆるやかに起伏するバックグラウンドの中に系統的に滑らかに低減されてきたのである。このような政府の取り組みの負の面の一つとして、このような姿勢が、

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

個々の大学の学科レベルにおける教員の人事にあたっても、年功制や文化的統一性に基づいた議論がなされ、学術的な成果は単なる附属的な議論に追いやられてきた、という点があるのではないだろうか。30 年以上にわたる日本の学術界での私の経験を振り返っても、大学制度におけるイノベーションに対する無数の「抵抗」があった。日本政府の保守的な国立大学政策の影響が強かった頃のことは、何年も経った今でも明確に思い出せる。エピソードには事欠かないが、20 年ほど前、私は 39 歳で外国籍でありながら日本の国立大学の自然科学分野のテニュアの教員になった。それは、二重の意味での例外的な事態であった。私の年齢は年功制に抗うものであったし、また私の外国籍は文化的統一性に対立するものであった。私が候補となったことで、激しい議論が起き、後に私が属することになる学科の構成員の間で様々な価値観がぶつかり合うこととなった。すべての教員が、というわけではないが、一部には、内容面でも人物面でも統一性を追求するばかりに、私が選出されることについて強い不快感を示した人もいた。ある年配の教授は、なぜこのような困難な状況が生じたのか、その理由を私に説明しようとしてくれたのだと思うが、学科内における私の存在を、よく手入れされた芝生の中でひときわ目立つ雑草に例えた。ともかくも、最終的には国際的な視点に立った決定がなされたのだったが。

とはいえ、長年にわたり追求されてきた日本の均質化政策は、きわめて高い社会効率性を導き、独自性があり、世界中から称賛されるほどの高みに至った。しかしながら、変化と革新の時代になった今、日本のシステムは、その際立った均質性を保ちながらも、突出した真の革新性を組み込んでいくべきである。ある母集団の教育レベルと社会的行動の平均値を累積的に示す社会的効率性と異なり、革新的効率性は、イノベーションの閾値を越えた、ゆえに標準化され予測可能な挙動からは、かけ離れた科学的、技術的、社会的事象の数から算出されるものである。図は、社会的効率性と革新的効率性を、日本的社会モデルと典型的な西洋的社会モデルとの比較において示したものである。前者は既存の規範の枠組み内で与えられる教育の高いレベルでの統一性に重点を置き、後者は既存の概念を打ち破り繰り返し新しいものを生み出すことを目指した高度に差別化された革新的な教育の形に重点を置く。二つの社会モデルの比較は、X 線のスペクトルに例えられる。ハイレベルな社会背景を持ちながらも突出したイノベーションは見られない、日本的な、完全に非晶質な社会と、共通の社会背景は欠きながらも、イノベーションの閾値を上回る多くの突出部が見られる、結晶質な西洋的社会の対照である。図に挿入された方程式は、先に示した比喩を関数の積分によりあらわしたものであり、関数の曲線で囲まれた面積が社会的効率性を、イノベーションの閾値を越えた鋭い突出部により示される小さな面積が革新的効率性を、算出したものである。今、革新的効率性の見地から、国際化という新たな道へ向かう日本政府のこのところの動きを見るに、これに伴う潜在的なリスクに対する厳格な管理がなされるのであれば、この新たな国際化政策が完全に遂行された将来の日本には大きな見返りが

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.



あるだろうと、私は強く前向きに考えている。事実、社会的姿勢に共通の高い背景があり、かつ、イノベーションによる鋭い突出部が多くある、その両方をその枠組みの中に合わせ持つことのできる社会こそが理想的な社会である。もし日本が将来の指導者を正しく選択できたなら、このような理想的な社会に到達できるのではないだろうか。日本がその高度かつ統一化された社会的背景の上に突出したイノベーションを打ち立てる方が、西洋の国々が統一的な社会背景を作り、多くのイノベーションによる上昇の助けを借りて背景全体を高めていくよりも早いということもあり得るのである。さらには今後数十年において、高度に国際的な心構えを持つ、多言語を話し、多文化的な若い日本人の世代を作り上げ、また同様に日本的な考え方を強く持つ若い外国人を育成するならば、日本はより大きな挑戦へと進むことを期待される国となるのではないだろうか。その挑戦とは、このような際立った人々が適応できる社会、さらには、彼らに相応しい主導的な役割を与えることのできる社会を形作られるかどうか、ということである。おそらくこれは日本の国際化において最も難しい点であろうが、我々はこの革命的ともいえる段階がどのように日本独自のやり方で起こるのかを目にする日を楽しみに待ちたい。日本の歴史において、大きな建設的な変革は常にそのようなやり方で成し遂げられてきたのであるから。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.